

女性化学者のパイオニア 黒田ちか

園田 寛 (カフェ・ブラッサンス店主)

NHKの朝ドラ「あさが来た」を見ていて、ふと思った。佐賀出身の日本初の女性化学者といわれる「黒田ちか」をヒロインにしたら、相当面白いものができるのではないかと。

黒田ちかは明治17年、現在の佐賀市松原に土族の7人兄弟の5番目、3女として生まれている。もちろん当時は女性には高等教育は必要ないとの考えが一般的だった。そんな中、ちかが最高学府まで行けたのは、父親が男女平等に子供たちに勉学の機会を与えたこと、ちかが勉強熱心だったこと、小学校の先生が師範への進学を強く勧めてくれたことによる。

佐賀師範学校を17歳で卒業し、1年間高等小学校の教師をした後、ちかは女子高等師範学校(現お茶の水大学)の理科に進学する。哲学や歴史、文学も好きだったちかは、文科にするか理科にするか、だいぶ迷ったようだが、理科の実験は学校でしかやれないことと、文章を書くのが苦手という意識から理科に決めたという。女高師で化学に対する情熱は高まった。卒業した後、1年間福井県立女子師範の教師を務めたが、母校からの呼び出しでまた女高師で研究を続けることになる。当時の最高学府は帝国大学であったが、女子は入学できなかった。ところが、東京、京都に続いて、仙台に東北帝大ができ、大正2年に初めて東北帝大が女子学生をとることになった。ちかは受験した。ほかに合格した二人と共に初の女子帝大生となった。

ちかは研究テーマに天然色素を選んだ。紫根(ムラサキソウの根)からシコニンという結晶を取り出すことに成功。この業績が注目され、わが国初の女性大学教授として東京女子師範学校(お茶の水女子大学)に招かれた。

さらに英国オックスフォード大学に2年間留学し研究を深めた。帰国後は設立されたばかりの理化学研究所とお茶の水女子大を行き来し、ベニバナの色素の結



写真は黒田ちか。
お茶の水女子大のホームページから

晶を突き止めたり、タマネギから高血圧症の治療薬を作り出したりしている。

今でも黒田ちかは、全国の女性研究者の目標となっている。もしテレビドラマのヒロインとなれば、エピソードも豊富である。まずは佐賀の若い人たちに、こんなすばらしい女性がいたことを知ってもらいたい。

設立20周年記念事業について (お知らせ)

日時 2016(平成28)年
8月6日(土) 午後

講師 片山善博(慶應義塾大学教授)

この夏、「女性参画研究会・さが」は設立20周年を迎え、記念の公開講演会を開催します。詳細が決まり次第、お知らせします。

「北京+20 北京JAC 20周年記念大会」に参加して

理事長 山崎 和子

1995(平成7)年、北京で開催された第4回国連世界女性会議において、日本政府とNGOの話合いの場が持たれました。

この話合いに参加したNGO関係者を中心に、この会議で採択された「北京政治宣言」と「行動綱領」の実施を目指して、同年11月、政府・自治体・議員・政党などにロビイングと政策提言を行うため発足した全国ネットワークのNGOが「北京JAC」です。

北京JACは東京に事務局をおき、世話人会により運営されています。北海道から沖縄まで14の地域コーカスや、またテーマ毎のコーカスがあります。

「女性参画研究会・さが」は地域コーカスの一つである「北京JAC九州」の団体会員であり、現在、事務局を担っています。

昨年、11月14日(土)、北京JACがスタートした地、文京区の男女平等センターにおいて開催された「北京+20 北京JAC20周年記念大会」に参加しました。

第4回世界女性会議において「北京宣言及び行動綱領」が採択されてから20年、この20年の我が国社会がどのように変わったのか、いや、変わっていないのか。それらに北京JACの活動、地域コーカスの活動がどのように影響したのかを考え、今後の活動に繋げるまたとない機会になりました。

1995(平成7)年、私は、県の男女共同参画担当に就いたばかりで、その夏、北京女性会議NGOフォーラムに「男女共同参画の翼」随員として20名の団員とともに派遣され、その時の思いが退職後の今、ライフワークとしての活動の元になっています。

今回の大会では、北京女性会議からの20年の成果や積み残された課題等を改めて会場の皆さんと共有し、各地域コーカスの活動状況や懸案等を発表し合う時間もあり、私の方からは、北京JAC九州の現状として、構成団体の会員の高齢化、会員数の減少などによる団体会員の減少、地域コーカスとしての学習会の実施が難しいこと等を話しました。

他のコーカスも似たような課題を持つところも見うけられ、そのようなことを聞けばやはり何か継続できる方法を見つけたいと感じたところです。

午後のパネル・ディスカッションでのパネリストの一人、北京JACの会員でもある上智大学法学部教授の三浦まりさんの発言は時宜を得たホットなものでした。

これまで、「クォータ制を推進する会」(Qの会)では、女性の国会議員を増やすべく、超党派議員連盟(「政治分野における女性の参画と活躍を推進する議員連盟」会長：中川正春衆議院員)で議論が進み、「政治分野における男女共同参画推進法案(仮称)」と「公職選挙法一部改正案」ができてきていること。今期国会における議員立法での成立を目指し、世界の流れに沿った第一歩が踏み出されようとしていること。

クォータの配分には10%から50%の幅があり、日本政府の目標でもある女性比率30%は国際的な目安となっているが、世界では既に人口比に基づく同率の男女比率で議会を構成するパリテ運動がフランス他で広がっており、近年ではラテンアメリカでもクォータからパリテへの進展が見られる。非常に遅れている日本でも望ましいのはパリテだということ。

また、法案が成立しても、実現までには10年、15年はかかるだろうということでした。

この12月10日に、衆議院議員会館において開催された、クォータ制を推進する会の決起集会には参加された方もいらっしゃると思いますが、多くの超党派議員のほか全国から150名を超える参加者で盛り上がり、「日本の明るい未来のために国会に女性議員を増やそう!」と決議文も読み上げられたとのこと。

これまで、各国のクォータ制やパリテ法を学習してきた本会においても、会発足から約20年経ってやっと法が制定されようとしていることに感慨を覚えるとともに、全国各地での大きなうねりに乗り遅れないよう、地元の代議士等に要望書を提出したところです。

■増やそう女性議員

主婦として子育てと介護の生活に一区切りした頃、地元の女性議員に背中を押されるかたちで議会に飛び込んで、13年目。

現在、市議として仕事をさせてもらっているのは、まさに選挙に手を挙げて「出た」からに他ならない。女性を「出にくく」しているものはいろいろある。

一言でいうならば、「男性中心社会」。固定的な性別役割分担意識<夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである>のもとで、日本では過度に女性が、育児や家事などを担っている実態があるが、女性が立候補する場合も例外ではない。

自治体の行政は一種のサービス産業ともいわれるが、そのサービスの中身や質や量を定める場所に佐賀県内女性議員の割合は7.0%（2015.5月現在）。それでは住民の多様なニーズや物の考え方に対応できないのではないか。

今よりも女性が政治や政策決定の場に出てこなくて、よしとするのか。

女性自身があるべき社会の姿を願って、自らリーダーにならずとも、最初のフォロワーになってはどうか。「(それ)あなた、いいね」と。

■家庭、地域にもっと男性を

「会社にもっと女性を」というなら、である。

「ワーク・ライフ・バランス」を確立する政策を進めるためには、健康な男性の標準モデルを前提とする働き方を改め、男女がともにかかわれる条件をつくり、ゆとりとした時間を確保することが人々の気持ちの余裕につながり、そのことが家庭や地域での人と人とのつながりを取り戻していくことに必要だ。

■まちでどんな光景をみたいですか

「そがん学童の良かなら、だいでん(誰でも)学童にいかんばやろうもん」

放課後児童クラブの開設時間の延長や、指導員(支援員)の処遇改善の課題について執行部とのやりとりの際、同僚議員が発した言葉である。クラブを利用している親子だけ、はいいかもしいないが、地域の中のクラブや児童・生徒を取り巻く様々の課題は、地域の課題として捉えられているのか。行政がやればやるほど、親は「おまかせ」の傾向が強まりはしないかとの懸念だったかもしれない。行政がサービスの中身を広げれば広げるほど、市民は「お客さん」「消費者」化してしまうとすれば、地方自治の本旨である住民の主体的なかわりに逆行することになる。市民生活の様々な懸案事項について、住民の声をもとに執行部に改善の提案を行うことは仕事のひとつだが、一方で、「出口はどこ?どこまでやればいい?」とも思う。

有りたい地域の姿を描き、意識的にまわりにかかわる大人(親)をつくっていくこと、そして問題を解決していく力をつけることができればと。そのためになにができるか、考えていきたい。



10周年記念事業

2005(平成17)年、私達は会設立10周年を迎え、7月23日(土)アバンセホールにおいて10周年記念事業を開催しました。13時30分から記念式典、その中で10年間にわたり、毎年、10万円をご寄附くださった、武雄市の古賀ミスマ様へ感謝状を贈呈しました。

記念事業の目玉は映画「ベアテの贈りもの」の2回の上映でした。

ご承知のようにベアテ・シロタ・ゴートンさんは22歳の若さで日本国憲法の草案にかかわり、憲法24条(両性の平等)を創案したことで知られています。

映画「ベアテの贈りもの」のホームページには、「このドキュメンタリー映画は、ベアテ・シロタ・ゴードンがピアニストの亡き父レオ・シロタのレコードを保有する岩手県紫波町のあらえびす記念館を訪ねるところから始まる。ベアテ・シロタ・ゴードンこそが、男女平等を定めた日本国憲法第24条の生みの親だった。」と記されています。

シロタ・ゴートンさんが映画を見られての感想(抜粋)を紹介します。

映画「ベアテの贈りもの」は藤原智子監督がとても美しい映像にまとめてくださいました。

そして全編に懐かしい父レオ・シロタのピアノ演奏が流れて幼いころを思い出します。

父母との17年間の滞日中、当時の日本の暮らしの

中で、人権についてたびたび違和感を抱いたこともあり、その後偶然に憲法草案にかかわりました。

日本国憲法に書かれた条項が全部実現するにはまだまだ時間がかかるでしょうが、世界の女性の平和や人権の活動の牽引する力になってほしいと思います。

映画の製作委員会は、赤松良子、岩田喜美枝ほかがメンバーでした。

赤松良子氏は「ベアテは日本女性の幸せを願い、憲法草案に携った。女性の人権と男女平等を謳った条文は一粒の種となって日本に根付いた。この映画を世に送ることができるのは、この上ない喜びである」と語っています。

この催しに対するアンケートでは、

- ① とてもよかった 75%
 - ② よかった 19%
 - ③ 普通 4%
 - ④ 期待外れ 2%
- という結果でした。



2016年(平成28年)2月18日(木曜日) 佐賀

男性主導の社会に「何でや?」 女性参画常識疑え

佐賀市 女性の参画をテーマに誰もががまやすい社会を考える公開講演会が18日、佐賀市で開かれた。「全日本おばちゃん党」代表代行で、大阪国際大教授(国際人権法)の谷口真由美さん(40)が「女性がインリティーである限り、オッサン社会に迎合せなあかん」と軽快な大阪弁で述べ、社会から常に関われる立場にある「多教者」に目を向けよう、と説いた。

「おばちゃん党」は2011年、込めたる怒りを蓄せ、社会2年に結成。5千人以上の女性に問題提起している。発起人女性がフェイスブックに風刺をの谷口さんは、「女性が輝く」

「おばちゃん党」谷口氏提言

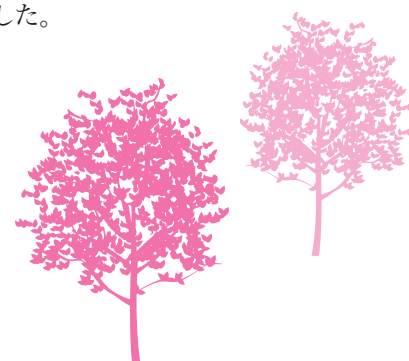
アバンセで講演会

社会が叫ばれる現状に「言葉自体がオッサンの上から目線」「言われなくても聞いてあげ」と突っ込みを入れ、男性主導の政治や社会に疑問を投げ掛けた。

働くことに「何でや?」と聞かれたり、夫同様に悩んだりする女性は「多教者のおごり」の中で、管轄されるマイノリティーそのものとして、多教者によって築かれた常識に疑問を持ち、「もう少し深く、トイレで考えれば社会は変わる」と明瞭に述べた。女性の生き方を考える一方、「難しいことを男性に任せたいのも事実」とも、目指すは「女性自身が『私が』と言える社会」とし、女性が働きやすい企業への投資が増えつつある経済情勢を挙げ、「使えるものは何でも使って女性の参画を促そう」と呼び掛けた。

講演は、NPO女性参画研究会・さがアバンセが主催。女性を中心に約100人が聴講した。(谷口大輔)

株式会社アバンセ、女性活躍推進センター、女性世代に輝いたおばちゃん」と題した谷口真由美さん、佐賀市のアバンセ



編集後記

2月13日(土)アバンセの県民グループ企画支援事業として、左記佐賀新聞記事のとおり公開講演会を実施しました。

悪天候の中、多くの方にご参加いただきましたが、期待どおりの講演でした。次号でご報告します。(Y)